

第3回 日韓シンポジウム
先史時代の日韓交流と大分
— 水稻農耕文化の伝播と成立 —

제 3 회 한일 심포지엄
수도농경문화의 전파와 성립



大分県教育委員会
1994

第3回日韓シンポジウム
先史時代の日韓交流と大分
— 水稲農耕文化の伝播と成立 —

主催 大分県教育委員会

共催 大分市教育委員会

会場 大分県農業会館

日時 1994年1月30日(日) 9:30~16:30

講師 韓国側 沈 奉 謹 (釜山市・東亜大学校人文大学考古美術史学科教授)

日本側 下條 信行 (愛媛大学法文学部教授)

田中 良之 (九州大学文学部助教授)

コーディネーター

賀川 光夫 (別府大学文学部教授)

日程 9:30 開場
10:00 開会 (開会行事)
10:10~10:20 講師紹介
10:20~12:00 講演「韓国稲作農耕文化の伝播と成立」 (沈 奉 謹先生)
<休憩>
13:00~13:50 講演「北部九州~西瀬戸地域の水稲農耕文化の伝播と成立」
(下條 信行先生)
13:50~14:40 講演「ヒトの移動と文化変化 —考古学と人類学の成果から—」
(田中 良之先生)
<休憩>
15:00~15:20 問題提起「日・韓水稲農耕文化の起源と伝播」 (賀川 光夫先生)
15:20~16:30 シンポジウム
16:30 閉会

ご挨拶

大分県教育委員会教育長 宮本高志

今から二千数百年前に朝鮮半島から北部九州に伝わった水稲農耕文化は、それまでの採集食料に基づく縄文時代に終わりを告げ、日本列島に本格的な農耕社会をもたらしました。これは歴史上の大きな変革期であり、以後の日本文化の基盤となるものであります。北部九州に近い大分県においてもこの初期の稲作文化が定着し、県内各地に多くの遺跡を残しております。これらの先人の足跡を見ますと、北部九州はもとより、瀬戸内地方あるいは韓国南部などとの幅広い交流があったことをうかがい知ることができます。

このたび、大分県教育委員会では、韓国、九州、瀬戸内地方の水稲農耕文化の伝播と成立をテーマとしたシンポジウムを開催することになりました。日本の米作りが様々な問題に直面している今日、このシンポジウムをとおして、その原点を学ぶことは、大きな意義があり、さらに両国の交流を深めるものと確信いたします。

今回のシンポジウムに際しましては、韓国及び県内外から斯界の第一人者の先生方に御出席いただき心から感謝申し上げます。また今回のシンポジウムを快く共催していただいた大分市教育委員会をはじめとする関係各位に厚く御礼申し上げ、ごあいさついたします。

平成6年1月30日

인사말

오이타현교육위원회교육장 宮本高志

지금으로부터 이천여년 전 한반도에서 북부큐우슈우에 전해진 도작농경문화는 채집경제에 기초를 두었던 효몽시대의 종말을 고하게 하고 일본열도에 본격적인 농경사회를 가져왔습니다. 이것은 역사상 큰 변혁으로서, 이후 일본문화의 기분이 되는 것이었습니다. 북부큐우슈우에 가까운 오이타현에서도 이 초기 도작문화가 정착되어 현내 곳곳에 많은 문화를 남기고 있습니다. 이들 선인의 유적을 보아도 북부큐우슈우는 물론 세토우쨌지방, 혹은 한국 남부 등과의 폭넓은 교류가 있었던 것을 알 수가 있을 것입니다.

그러므로 오이타현교육위원회에서는 한국, 큐우슈우, 세토나이지방의 도작농경문화 견과와 성립을 주제로 한 심포지엄을 개최하게 되었습니다. 일본의 농사가 여러가지 어려움에 직면하고 있는 오늘날, 이 심포지엄을 통해서 그 원류를 배우는 것은 큰 의의가 있으며 특히 양국의 교류를 깊이하는 것이라고 확신합니다.

이번 심포지엄에 즈음하여 한국 및 현내외의 제일인자이신 선생님들이 참석해 주신 점, 마음으로부터 감사드립니다. 또한 이번 심포지엄을 쾌히 개최해 주신 오이타현교육위원회를 비롯하여 관계자 여러분들에게도 깊은 감사를 드리는 바입니다.

1994년 1월 30일

韓国稲作農耕文化の 伝播と成立



・沈 準 謹
・1943年生
・韓国東亜大学校教授
同大学付属博物館長

I

韓国の稲作農耕に関する資料は最近、韓国内の活発な考古学的調査によって、新しいものが日々増加している。1920年、金海貝塚で炭化米が発見されて以来、1970年代の驪州欣岩里、扶余松菊里、平壤南京遺跡で発見された炭化米は、この方面の研究において重要な資料的役割を果たした。そして、最近紹介されている金浦平野の泥炭層で発見された炭化米と広州クントゥル、江華牛島で発見された板圧痕も、今は資料として使用することが困難であるが、今後、古代米を研究するのに役立つことはまちがいない。

このような資料の増加にもかかわらず、韓国の稲作農耕についての研究は、周辺国である中国や日本に比べると初歩的な段階といえるほど、大きな進歩がみられない実状である。

私もまた、この方面に関心を持ってきたことは事実であるが、そうとはいえ、今ここでははっきりとした結論を持って述べるものでは決してない。しかし、ここでは研究するための作業のひとつとして、これまで発見された各種関係資料を総合・分析し、韓国の稲作農耕の成立時期と伝播経路を推定してみようと思う。

この過程で陸稲や水稲、野生稲と栽培稲の区別の問題は、これまでの資料である炭化米や板圧痕だけではその判断が困難であることから、ここでは論じないこととする。皆様の惜しみない叱正を願いたい。

II

韓国ではB.C.5000～B.C.1000年の間を新石器時代(櫛目土器時代)、B.C.1000～B.C.300年の間を青銅器時代(無文土器時代)という。新石器時代は日本の縄文時代のように、採集経済生活が中心であったと考えられるが、青銅器時代は稲作農耕を中心とした生産経済体制に入るとともに、土器、石器、青銅器など、生活道具をはじめとして、支石墓、石棺墓などの墓制、竪穴式住居に環濠を巡らした集落、石剣、石鏃のような武器など、多方面にわたる変革がなさ

れ、古朝鮮のような古代国家もこの時代に成立したと考えられる。

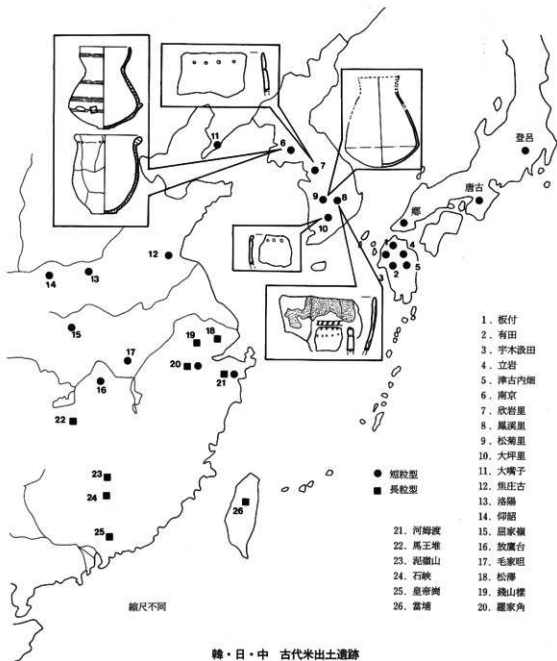
一方、韓国における先史時代農耕の上限については、すでに調査報告された黄海北道智塔里、平安南道弓山里、釜山市東三洞などの櫛目文土器後期段階に該当する遺物層で、これを認定できる文化要素が確認されており、農耕は遅くとも新石器時代である櫛目文土器後期段階には行われていたということがわかる。すなわち、智塔里遺跡では粟または稗と推定される炭化穀物が石犁、石斧、石鎌、石臼、石槍、石鏃等とともに出土し、弓山里遺跡では石鉄、骨鎌が、東三洞遺跡では石臼、石斧が各々出土し、櫛目文土器とともにこれらのセット関係をもつ道具が調理、収穫、耕作、開墾という農耕生活の過程を推定させてくれる。しかし、稲作農耕の開始と伝播経路については、この程度の考古学的な資料だけで結論に到達することは難しい。

稲作農耕の場合、これまでの資料によれば、京畿道驪州欣岩里第12号住居址出土炭化米と慶尚南道陝川鳳溪里で出土した栲杖痕が比較的早い時期のものと考えられ、これとほぼ同時期のものが平壤市南京遺跡で出土している。そして、その次が慶尚南道晉陽大坪里遺跡と全羅南道麗川月内洞遺跡、忠清南道松菊里先史遺跡出土の炭化米であろう。ところで、最も早い時期のものの一つである欣岩里遺跡の実年代を報告者はB.C.13~B.C.7世紀と推定していることから、稲作農耕の開始は、この欣岩里遺跡を基準とするならば、まずB.C.7世紀以前に始まったといえる。

それならば、遅くともB.C.7世紀以前に始まったと推定される稲作農耕がどのような経路を経て韓国や日本まで各々伝播したのだろうか。

これについては北方説、南方説、南北二源説など、諸学説があるが、北方説を中心に検討してみることにする。まず、古代米の特徴とその分布によれば、韓国、日本で出土する古代米は短粒型（日本型）であり、原産地である中国の場合、華南地方は長粒型（印度型）、華中地方は長粒型、短粒型が混在しているが、華北地方は短粒型という点から、短粒型の分布が華北、韓国、日本とつながることがわかり、北方説が有利な立場にあると推測される。

次に考古学資料からみてみよう。韓国の古代米が出土した欣岩里第12号住居址の場合、無文土器のうち、比較的早い時期に編年される壘形、壺形、鉢形などの孔列土器系統と紅陶片、そして漁網錘、高杯脚などが出土し、石器は有柄式磨製石剣、有茎・無茎の磨製石鎌、紡錘車、環状石斧、半月形石庖丁、石斧などが出土した。そして、平壤市南京遺跡ではコマ形土器が出土することを除けば、欣岩里と同一の文化様相であり、鳳溪里遺跡でも同様である。その次の段階の遺跡である松菊里第54-1号住居址では壘、壺、鉢形などの無文土器片と紅陶片、そして磨製石剣、石鉄片が出土し、隣接した遺構では抉入石斧、三角形石庖丁、半月形石庖丁などの石器が発見された。晉陽大坪里遺跡では蓋石式、基盤式支石墓と紅陶、孔列土器、そして石斧、石鎌、磨製石剣、半月形石庖丁、三角形石庖丁、抉入石斧、偏平石斧など、比較的遅い時期の青銅器文化内容の遺物が出土した。これらの内容を総合し、その共通点を探せば、まずすべての遺跡で紅陶と半月形石庖丁、石剣、石鉄などが出土し、欣岩里、大坪里遺跡では孔列土器が、



そして平壤市南京遺跡ではコマ形土器が出土した。ところで、南部地方の場合、欣岩里遺跡では柄のある石剣が出土したが、大坪里、松菊里遺跡では柄のない石剣が出土し、また欣岩里では見られなかった扶入石斧、三角形石庖丁が大坪里、松菊里で各々出土した。そして、大坪里遺跡では蓋石式または碁盤式の支石墓がある。平壤市南京36号住居址は前述したように青銅Ⅰ期の遅い時期に編年されている。ところで、次の段階であるⅡ期に編年される第3号住居址では断面が円形の粘土帯口縁土器とともに美松里型土器が出土した。もちろん地域的な違いはあるが、Ⅱ期の粘土帯口縁土器は大田槐亭洞の韓国式銅剣とともに出土したものとたいへん類似しており、美松里型土器は器形上、松菊里で出土した紅陶とよく似ている。このような現象は南京遺跡Ⅱ期が扶余松菊里遺跡と大田槐亭洞遺跡の過渡的な性格をもつことをしめしており、それより先行するⅠ期の遅い時期も年代的に松菊里より大きくさかのぼらないものとみられる。

このようにしてみると、韓国の稲作農耕はまず土器において、孔列土器と紅陶がセットをなす分布圏と一致する感はなくはないが、周知のように孔列土器、紅陶は韓国東北地方の茂山虎谷洞、会寧五洞遺跡など豆満江流域と鴨緑江中流で櫛目文土器末期に発生し、東海岸に沿って南下したもので、西北地方のコマ形土器分布圏とは明確に区分される。この土器のうち紅陶は北側満州赤峰紅山後第2文化層である紅陶文化圏とつながるかも知れない。したがって、土器の分布圏としては中国と西海を間に挟んだ平安、黄海道の西北地域よりは、むしろ東北地方が有力な位置を占めており、北方説のうち、北廻説も無視することができない。しかし、気候的に、あるいは半月形外湾石庖丁のような磨製石器の分布では稲作農耕の可能性が薄いことから、伝播はしたかもしれないが、栽培は不可能であったろう。

したがって、考古学的な立場では華中、または華北地方から漢江流域までの伝播過程に若干の問題が残るが、平壤など大同江流域と遼東半島で古代米が出土している現在の状況としては、華中以北の北方説が最も有力な位置を占めるものとみられる。また、伝播経路についての積極的な資料が補充されなければならないであろうが、中国の場合、B.C.1000~2000年の間には稲作農耕の分布が山東半島以北の地域まで拡大しており、B.C.1000年頃、西周青銅器が渤海湾から遼東半島まで拡大し、大連でB.C.1000年頃の短粒米が出土したことなどを考慮すれば、現在までのB.C.7世紀以前という開始時期からみて、北廻説がさらに有力な資料を確保していることになる。

III

韓国の稲作農耕の始源をこれまで発見された関係資料を総合し、考古学的な立場を中心に整理してみた。その結果、韓国の稲作農耕の開始は、現在の段階としては京畿道欣岩里遺跡出土の炭化米を最古の標識として、少なくともB.C.7世紀以前であると考えられる。そして、その伝播過程は中国華中地方ではじまった短粒米が北側に拡散し、それが各種磨製石器、青銅器と

ともに韓国青銅器文化期に伝来したと考えられる。

したがって、韓国の稲作農耕は当時の水田が確認されていない現時点では確実に述べることは難しいが、蛤刃石斧、半月形石庖丁、柱状石斧などの農耕道具が古代米資料とともに出土する時期からいったん稲作農耕が開始したとみるのが妥当であると考えられる。そのような意味で韓国初期磨製石器は中国華北地方と相互に類似し、日本の場合は石剣、石鎌、三角形石庖丁、扶入石斧、蛤刃石斧などが韓国南部地方のものといへん類似しており、中国、韓国、日本の順にその伝播過程を示しているといえよう。そして、もし韓国の稲作農耕の開始がB.C.10世紀頃を前後する時期と推定可能ならば、それは文献上にみられる東夷族の移動過程や箕子朝鮮問題とも少なからぬ関連性をもつものと予想される。今後、北方経路と考えられる山東半島、渤海湾一带と遼東半島、北韓などの農耕資料はもちろんのこと、土器、磨製石器、青銅器などの考古学的な資料に関心をよせ、より積極的な結論に到達しようと思う。

参考文献

- 金元龍「韓国稲作起源についての考察」『廣積学報』25, 26, 27合集 1964年
ソウル大学校博物館『欣岩里住居址4』1978年
国立中央博物館『松菊里1』1981年
科学百科辞典出版社『南京遺跡に関する研究』1984年
孫宝基「わが国の稲作の新事実」『東方学志』54 1987年
任孝宰「京畿道金湍半島の考古学研究調査」『ソウル大学校博物館年報』2 1990年
沈奉謹「韓国先史時代稲作農耕」『韓国考古学報』27 1991年
賀川光夫「縄文式後晩期における大陸文化の影響」『歴史教育』9-3 1961年
石毛直道「日本農耕の系譜」上・下『史林』51-5、6 1968年
西谷正「朝鮮半島における初期稲作」『考古学研究』16-2 1969年
下條信行「九州における大陸系磨製石器の生成と展開」『史淵』114 1977年
岡崎敬「日本における初期稲作資料」『朝鮮学報』49 1978年
森貞次郎「縄文水田と最古の足跡」講談社 1979年
巖文明「再論中国稲作農耕の起源」『農楽考古』第2期 1989年
田中良之「いわゆる渡来説の再検討」『日本における初期弥生文化の成立』1991年
許明綱ほか「大嘴子青銅器時代遺址発掘紀略」『遼海文物学刊』1 1991年
甲元眞之「長江と黄河—中国初期農耕比較研究—」『国立歴史民俗博物館研究報告』40 1992年

北部九州～西瀬戸地域の 水稲農耕文化の伝播と成立



・下條 信行
・1942年生
・愛媛大学教授

1. 北部九州の初期水稲農耕

わが国最古の稲作地帯

現在、日本初期の水稲農耕遺跡は、青森県砂沢遺跡に見られるように弥生前期のうちに本州北端にまで広がっていたことが、明らかになってきた。これは、初期農耕の第一次の伝播は伊勢湾沿岸までとした従来の考えかたからすると大きな変化である。

だが、この列島北端までの拡大の基となったのは、水稲農耕のわが国への最初の伝来地である北部九州である。ここでいう北部九州というのは、海を介して朝鮮半島に直面する玄界灘沿いの諸平野で、具体的には西から佐賀県唐津平野、福岡県糸島平野、同福岡平野、粕屋平野などの限られた地をさしている。これらの地域に水稲農耕はまず朝鮮半島より伝来、定着し、その後、各地に紆余曲折を経て伝わっていったのである。

その時代は、土器の特徴から刻目凸帯文単純期といわれる時期で、これまでの土器編年観からすれば、縄文時代晩期後半から終末のころである。その代表的な遺跡として下記のものがある。

唐津平野 菜畑遺跡（佐賀県唐津市） 宇木汲田遺跡（同）

糸島地区 曲り田遺跡（福岡県糸島郡二丈町）

福岡平野 板付遺跡（福岡市博多区）

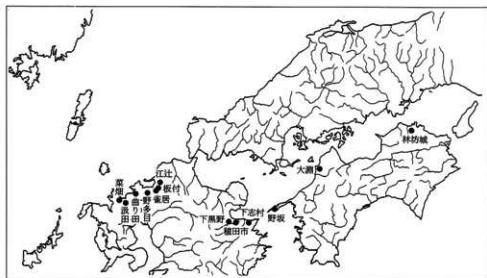
雀居遺跡（福岡市博多区）

粕屋平野 江辻遺跡（福岡県粕屋郡粕屋町）

これらの遺跡から、それ以前の縄文時代に存在しなかった、多くは水稲耕作に関連する新たな遺構や遺物が出土している。

初期の水田

初期の水田の例として、菜畑遺跡、板付遺跡、野多目遺跡（福岡市南区）が知られている。菜畑遺跡は谷の両側に開かれた水田で、その中央に水路を通してある。この水路は排水を目的



遺跡分布図

とした排水型で、地形の状況に応じた開田を行なっている。板付遺跡、野多目遺跡は導水を行なう灌漑型の水田である。

板付遺跡を例にとると、台地縁辺沿いに水路を掘って上流より水を導き、これに自然木、木枝、草などを組み合わせて堰を作り、ここに水を貯水して水位を高める。高まった水は水路と田の間の土手を断ち割って造られた小水路を通して田に誘水される。この小水路の水口には杭、矢板を打ち込んで誘水時の水量の微調整が計られるようになっている。また高位水田より流下してきた余水は、逕流して堰に戻せるようその為の小水路も設けられているなど、用水の活用はきわめて合理的である。田に送られた用水は、高位水田より低位水田へと順次送られるようになっている。田は土盛りによって造られた畔によって区画されるが、板付遺跡の場合、短辺10m、長辺50m以上もある大区画で、一般の弥生時代水田に比べて大区画である。

以上のように、初期水田の段階から用水の活用と管理は合理的かつ高度なものであって、これには、水稲を伝えた人々の長い経験と深い知識がなくてはなしえなかったであろう。

木製農具

日本の水稲耕作の農具は、長い間刃先も木製の木製農具が主役で、古墳時代中期頃までこうした状態は続いていた。その先鞭をなしたのが、この時期に出現した木製農具で、菜畑遺跡や板付遺跡では、打ち鎌である諸手鎌（両端に刃がある鎌）と水田の表面をかきならすえぶりが出土していて、初期水田ではこの二種が主体と考えられてきた。鋤などの開墾、土運び道具は後に出現するものと見られていた。この考えは今も大きな変更を加えることは必要ないが、最近発掘された雀居遺跡では、これらの他に、平鎌、一木作り鋤、同じ一木作りの權状鋤、杵などが出土して、鎌、鋤、杵（脱穀具）など、弥生時代～古墳時代の基本的な木製農具は水稲

農耕開始期からすでに備わっていたことが判明した。いま、朝鮮半島に直接比較できる木製農具は出土していないが、これらも朝鮮半島からの水稲農耕の伝播にともなって出現したことは間違いないであろう。

石製農具（大陸系磨製石器）

これらにも縄文石器に見られない新たな道具が出現する。まず農具関係でいえば石庖丁（石刀）と石鎌がある。初期の石庖丁には、紐穴孔が擦り切り溝であらわされるものが目だつ（菜畑遺跡、宇木汲田遺跡）が、この種の石庖丁は朝鮮半島の南部に比較的好く分布するもので、刃部が片刃である点も共通している。しかし、北部九州の初期稲作期に広く使われた石庖丁の材質（頁岩質砂岩）とは異なっている。

工具には抉入柱状片刃石斧（有溝石斧）と扁平片刃石斧とがある。いずれも刃が片刃になる加工斧である。北部九州初期稲作期の抉入柱状片刃石斧は基部（頭部）が平基で、抉りは明瞭、後主面は弓状に内傾し、刃部の鋸も明瞭で、横断面は角の明確な長方形を特徴とするが、これらの各種特徴を兼備しているのは、朝鮮半島南部の片刃石斧である。扁平片刃石斧は、平面切り餅状の長方形で、両側は直なる面をなし、後主面は弓状の内傾をなす。この二種の石斧は、縄文石斧に見られない形態と規則的で整然とした作りを示し、朝鮮半島南部の石器が伝えられたことを示している。

受容しない石器と変容する大陸系磨製石器

朝鮮半島南部には上記の石器と並んで、伐採用の両刃石斧が発達していた。平面形は長方形で、横断面円形ないし楕円形をなす厚みのある厚斧で、伐採石斧としては発達の極みに達した良質斧である。ところがこの石斧だけは、わが国に伝わってこなかった。その時、わが国で使われた伐採石斧は、基部（頭部）が狭く、刃部が幅広い平面長台形をなし、厚みも薄い石斧で、大きさだけは大きい。これは、縄文伐採石斧に類似するもので、それをやや大形化し、重量増を計ったものであるから基本的には縄文伐採石斧の系譜で捕らえられるものである。このことからすると、初期農耕文化の伝播は、わが国に在来する文物はいかに良質のものが朝鮮半島に成立していても、伝播することとならず、縄文時代になかったか存在が希薄な文物は伝来、または受容するといった構図を描くことができる。

このことは、伝来磨製石器のその後の展開にも現れ、朝鮮半島で時間をかけ到達点にまで達成した磨製石器は、伝来頭切においてはオリジナルな形態で伝わるが、その後直ちに変容が始まるなど、自ら長時間を掛けて育て上げたものでないで伝来石器の上質な部分を継承定着させず、いささか弛緩形態に後退させ、日本的形態で安定させることになってしまう。

受容と非受容の問題からすれば、土器も同じで、在来しなかった壺は積極的に受容しているが、煮炊きするに必要な甕は在来の土器（深鉢）が存在していたので、痕跡的にしか受容していない。

弥生土器の出現

外来的か内在的かその出現の契機については議論の分かれるところであるが、やがて甕形土器（刻目凸帯文土器）は刷毛で表面が調整され、口縁が僅かに外反し、黄褐色の弥生土器に変わる。弥生式土器の出現である。この出現も稲作出現の地である北部九州に興るようで、その最初の土器形式を板付Ⅰ式という。この分布域は限られているようで、やがて板付Ⅱ式に移行する。この板付Ⅱ式の古い段階（板付Ⅱa式）に北部九州を越えて広がるようで現在、東部瀬戸内にまで確認できる。この拡散がまた新たに弥生文化を広げたようである。

2. 西部瀬戸内の初期水稲農耕

東九州の初期水稲文化

大分平野にも縄文晩期にすでに水稲農耕が伝わっていた可能性がある。十分な資料ではないが挾間町下黒野遺跡、大分市植田市遺跡が参考になる。両遺跡から、刻目凸帯文土器（甕）、浅鉢とともに中形の壺が出土しているのがその証拠である。そして、甕は一条凸帯で、肩上部に粗い条痕を比較的良好に残し、底部が台形をなさないもので、北部九州とは異なった特徴をもつものである。

その後、板付Ⅱa式の段階にも継起されたようで、大分市下志村遺跡から同期の土器が出土し、その一部（甕）は東北部九州の土器と共通し、また瀬戸内に共通する施文法が壺にみられる。愛媛から佐賀関につきだす佐田岬半島の先端の野坂貝塚は縄文後期末の三万田式から弥生中期の下城式まで連続して大分系の土器を出土する遺跡であるが、この中に板付Ⅱ式の土器が含まれているのは、同期文化がこの地方まで広がっていることを示している。

西部瀬戸内の初期水稲文化

初期水稲農耕は四国の北岸を東に走り、晩期後半の凸帯文土器単純段階に愛媛県松山市大淵遺跡、香川県高松市林・坊城遺跡に水稲農耕の足跡をみることができる。大淵遺跡ではコメ、コメ丘痕、稲茎のほか石庖丁、石鎌を出土し、林・坊城遺跡では諸手鋸、櫛状鋸などの木製農具を出土している。大淵遺跡の甕の圧倒的多数は在地の甕であるが、その中の僅かの甕は、東九州のそれに類似したものであり、ここへ水稲農耕の伝播は北部九州から直接伝わったものではないことを知る。そして、壺の肩には南部朝鮮に特徴的にみられる、黒斑の茄子文土器がある。

しかし、壺の出土量は3%ときわめて少量で、水稲が伝わったにしても、必ずしもその普及、定着度は高く評価はできない。そして、扁平片刃石斧、伐採石斧は縄文系のものであり、北部九州ほどの大陸化は見られない。石庖丁も一点は方形、両側挟りであり、他の一点は外湾刃半月形であるが円形穿孔ではなく、両側挟りであるなど、大陸系磨製石器の伝わり方にも変容が生まれている。

日本化したとはいえ、一応の大陸系磨製石器が瀬戸内を席卷するのは新たな板付Ⅱ式文化の波及を待ってである。

ヒトの移動と文化変化

— 考古学と人類学の成果から —



・田中 良之
・1953年生
・九州大学助教授

1. はじめに

文化が変化するという点については、こんにち多くの要因が考えられるようになったが、過去にはどの人間社会でも同じような進化発展の過程を辿るという考えが主流であった時期があった。その次には人間集団の移動や交流によって文化が広まり、その結果文化が変化するという考え方が一般的になり、その後はむしろ変化の過程を重視して、社会・文化の複雑な構造がどのような相互の関わりにおいて変化するのかという、システムや構造としての働きを関心の中心にすえた研究が主流となった。そして、こんにちではさらに価値観や人間の心理までを考慮に入れた研究も行われるようになってきている。

遺跡や遺物のようなモノとしての文化を扱う考古学の特性として、文化がなぜ、どのように変化するのは大きなテーマであり続けるものである。そして、文化変化に対する考え方が変わり、ヒトの移動が文化変化の原因のすべてでないことは周知のこととなっても、ヒトの移動によって引き起こされる変化の事例もあることは否定できない。つまり、「ヒトの移動と文化変化」はこんにちなお考古学の重要なテーマの一つなのである。

さて、人間集団の移動を考古学的に実証することは必ずしも容易なことではない。しかし、その困難さを乗り越えるために、考古学者はさまざまな方法を考えてきた。その方法の一つは、古人骨資料を検討することである。すなわち、他の文化を受け入れた後に人骨の形質に変化が生じ、しかもその形質が文化の発信地のものと同じか類似するものであれば、文化の移動が人間集団の移住を伴うものであった可能性が強くなるわけである。

かつてはこのような議論は、ヨーロッパの新石器～青銅器時代を事例として行われてきた。しかし、このような事例が日本にもある。それは弥生時代の開始期、すなわちわが国で稲作農耕が開始された頃の北部九州を舞台としたものである。

2. 人類学の渡來說

九州大学医学部教授であった金関丈夫氏は、縄文・弥生・古墳時代の人骨資料を比較した結

果、弥生時代の北部九州にはそれまでの縄文人と異なる高顔・高身長集団が分布することに注目した。そして、この事実を説明する仮説として、縄文時代晩期に稲作の技術を持った集団が朝鮮半島から北部九州に渡来し、在来の縄文人集団と混血して、高顔・高身長の弥生人の形質ができたという説を提唱した。さらに、混血の影響は山陰や近畿地方には及んだのに対して、西北九州や南九州には及ばなかったとした。昭和30年代のことである。

この金関説は、渡来人の故地、渡来した時期・場所、混血の形質的影響が及んだ範囲と方向等を示し、当時の形質人類学・考古学の成果の総合を行い、はじめて具体的に考古学的に位置づけたという点で高く評価されるべきものである。これに対して、人類学会においては長く議論が行われてきたが、今日では広く認められるに至っている。

ところが、近年、埴原和郎氏は、山口県土井ヶ浜遺跡や佐賀県三津永田遺跡の弥生人が北アジアの集団と似ていることから、渡来人の起源は北アジアにあるとし、金関氏によって渡来的とされた土井ヶ浜遺跡などの弥生人は、渡来人そのものであろうとした。さらに、人口増加率と頭の形の変化率に基づいて、渡来人の量が、紀元前300年から紀元700年までの1,000年間で3,024,156人に及ぶという計算結果を発表し、大量渡来説を主張している。このように、金関氏の渡来説を含めて稲作の伝播・受容期におけるヒトの移動に関する学説は、主として人類学の立場から提出されている。そればかりか、近年では「言いたい放題」に近い状態とすらいえる。これらに対して考古学の立場からはどのような対応をすべきであろうか。

3. 考古学からみた渡来説

日韓の考古学的事実関係は、沈奉謹・下條信行両氏の発表において示されたとおりであろう。すなわち、土器・石器などの文化諸要素の多くのものが稲作の開始期を前後して朝鮮半島から北部九州を中心とした地域にもたらされ、やがて弥生文化が成立する。しかし、朝鮮半島からの文化伝播は一時期に限られるのではなく、散発的であるにせよ縄文時代晩期前半には少なくともコメの出土例があり、晩期中頃には土器の文様に影響が認められるなど、長い時間幅の中で文化の伝達が行われた形跡がある。そして、土器においても石器においてもすべてが朝鮮系のものかというそうではなく、たとえばカメは縄文系で壺は朝鮮系であるというように、選択的に文化が受容されている。つまり、文化の発信地である朝鮮半島の「無文土器文化」そのものに変化したわけではないのである。さらに、これらの時期には、朝鮮系(無文土器文化系)の遺物・遺構のみを出土する遺跡は一つもなく、すべて混在した状態で出土する。

このような事実は、渡来人の数と役割を考える上で重要である。すなわち、渡来人が稲作とそれに関連するさまざまな技術・情報を伝え、それによってわが国が稲作農耕社会へと変化していったことは明らかであっても、渡来人が縄文人を圧倒し、駆逐して集落を作ったりした様子はなく、むしろ縄文人と平和裡に共存していた形跡がうかがえるのである。

4. 渡来のあり方と文化変化

さて、それでは渡来人の渡来のあり方はどのようなものであったのだろうか。渡来人は大量だったのか、それとも少量だったのか。文化変化のあり方はどのように説明できるのか。そもそも、渡来人を受け入れ、混血したのであれば、受け入れた縄文人はどのような結婚や居住のシステムを持っていたのか。などの問題が次々に出てこよう。

その中でも、まず、きわめて大量の渡来人を想定する埴原氏の仮説が問題となつてこよう。この説は、上記のような考古学的事実からはとうてい支持できないものである。しかし、どのように批判するのか。

埴原氏は、主として人口増加率に基づいて渡来人の数量を推定した。すなわち、縄文晩期と7世紀の推定人口(75,800人と5,399,800人)から、約1,000年間の年あたりの人口増加率(0.427%)を求め、世界の農耕民における人口増加率と比較し、その差を渡来人による人口増と考えたものである。つまり、世界の農耕民の紀元一千年紀における人口増加率が0.1%程度であることから、0.427%という増加率は考えがたいとし、0.1%を除いた残りを渡来人による増加と考え、1,000年間に3,024,156人の渡来があったとしたのである。

これにはいくつかの問題点を指摘することができるが、何よりも問題なのは、埴原氏が用いた世界の農耕民の人口増加率は、いずれの農耕社会においても安定期に入った段階以降のものであり、農耕開始直後の人口増はこれらの値には含まれていないことである。

そこで、一例として福岡県小郡市三国丘陵の遺跡群をみると、農耕開始期の遺跡は7カ所であるのに対して、前期末の遺跡は28カ所あり、そのうちの3カ所は朝鮮無文土器のセットが出土していて渡来人の居住地と考えられるものである。この間の時間幅は長くても200年程度と思われるので、埴原氏が用いた人口増加率推定式に、これらの遺跡数を代入して人口増加率を求めると、0.693%となり、埴原氏が考えがたいとした増加率を上回るのである。もちろん、これは、各遺跡の人口を同数であると仮定した試算であり、問題は残る。ところが、前期末の集落は、前期初頭の集落のいくつかを包摂した規模であることが知られており、この増加率がさらに大きくなることはあっても小さくなることはない。したがって、人口増加率に基づいて大量の渡来人を想定した埴原氏の説は、その根拠を失ったといえよう。

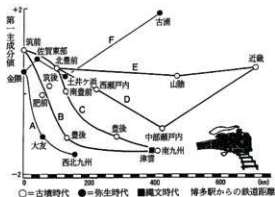
このように、渡来人の数は縄文人を飲み込んでしまうほど大量ではないという考古学側の主張が支持されよう。また、これによって、縄文人の一定の主体性が想定でき、無文土器文化すべてを受け入れるのではなく、選択的に受容したあり方も、説明がつく。さらに、縄文晩期や弥生時代の西日本における婚姻・居住のシステムは双系的(選択居住的)であった可能性を示唆する分析例が得られはじめています。先学が示すように、双系的社会はメンバーシップが緩やかであり、渡来人と縄文人の平和裡の共住という考古学的想定と矛盾しないのである。



弥生人の復顔
(山口県土井ヶ浜遺跡山土・九州大学医学部蔵)



縄文人の復顔
(熊本県御領貝塚山土・九州大学医学部蔵)



渡来人的形質の拡散 (土肥直美・田中良之 1989より)

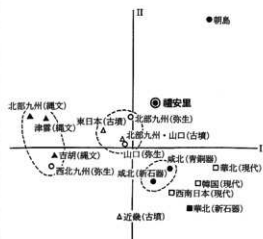
渡来人的特徴を示す第一主成分係が、北部九州を中心に、どのように変化しているかを鉄道距離との関係で示した。渡来系遺伝子の拡散は必ずしも距離によるが、またその方向も一樣ではない。山陰や瀬戸内地方は、筑前から巨尾の西には渡来人的特徴が強く、渡来系遺伝子が北部九州から東の方へと偏った拡散を示している。

津置貝塚被葬者のQモード相関係数

歯種の組み合わせ	群	組	平均値
上顎第1小白歯・同第2小白歯・同第1大白歯	男性(I・II期) 女性(I~III期)	35 10	0.345*** 0.320*
	現代人他人同士	200	0.019
上顎第1小白歯・同第2小白歯・同第1大白歯・下顎第1小白歯・同第2小白歯・同第1大白歯	男性(I・II期) 女性(I~III期)	20 13	0.426** 0.407***
	現代人他人同士	200	0.074

***他人同士との間に有意差があるもの(誤差の範囲0.1%以下)
**他人同士との間に有意差があるもの(誤差の範囲1%)
*他人同士との間に有意差があるもの(誤差の範囲5%)

縄文晩期津置貝塚



東アジア出土古人骨の頭蓋計測値9項目を用いた主成分分析 (金鍋晶・小片丘彦他 1993より)

日・韓水稲農耕文化の 起源と伝播



・賀川 光夫
・1923年生
・別府大学教授

日・韓における「農耕の起源」という研究課題は、たえず古くて新しい問題である。特に日本では昭和2年（1927）神奈川県相模原市（下新磯村）勝坂遺跡の発掘によって縄文中期勝坂式土器と共に多量の打製石斧が出土しこれを耕作具として農耕が行われていたとする意見が大山柏によって提起された。この事例は今日のように学際的研究と多数の研究者による総合的研究によって議論を煮詰める時代とちがって、少ない資料と少数の研究者によって行われたこともあって、今日かえりみられなくなっている。しかし打製石器が「土掘り具」として農耕論の問題として生きていることをおもうと、農耕の起源の課題において、学史的存在の意義はいささかも消えていない。何故かという考古学は過程の学問で、推論の範囲に止めるべきものであるからである。

大山柏の打製石斧農具論に肯定的立場をとられたのは森本六爾であった。森本は縄文時代に農耕が開始されたことを唐古遺跡の調査（弥生時代）から確信をもって推理していた。後に藤森栄一の「縄文農耕」はこの線上の研究を母体としていたことは明らかである。しかし、大山の中期農耕論は昭和12年（1937）山内清男によって反論（歴史公論）が行われ、議論が高められた。この段階の農耕論にとって決定的に欠けていたものは、栽培植物についての資料不足であったことと、農業育種学との協同研究態勢の欠如などがあげられる。

栽培植物が稲であるという具体的な取組は、昭和26年（1951）坂本経堯による熊本県玉名市古閑原貝塚の発掘においてである。この調査において、縄文中期阿高式土器に混在して数粒の炭化米がみつかり、稲作の開始について、新たな問題の提起があった。この坂本の研究も九州北部における稲作開始論として今日も受け継がなければならない検討課題である。

さて稲作農耕の起源の問題を急速に高めたのは昭和25年（1950）から開始された日本考古学協会における弥生式文化特別委員会、昭和37年（1962）から始められた西北九州特別委員会の二つの調査研究であった。前者は杉原荘介、森貞二郎、岡崎敏などによる夜臼、板付遺跡など北部九州の縄文晩期、弥生初期の重要遺跡の発掘を通して行われた。この調査研究は、福岡市教育委員会によって今日まで継続され、環濠集落をはじめ、水田跡の発見につながっている。

後者は島原半島の雲仙岳山麓一帯の縄文晩期集落と支石墓の調査等が中心であったが、島原市郊外の山ノ寺遺跡等でコメ圧痕土器等が発見され、ここでも稲作農耕の問題が提起された。

水田の探索を主目標として調査が行われたのは鏡山猛を中心とする日本・フランスの合同調査、唐津市汲田遺跡の調査であった。この調査によってあい接近する上・下貝層から縄文終末(夜白)、弥生初期(板付)の層位が確認され、九州大学理学部高島良正研究室において次のような¹⁴C測定結果が報告された。

縄文晩期(夜白式) 2370±50 B・P、(420±50 B・C) KUR I-53

弥生初期(板付I式) 2240±50 B・P、(290±50 B・C) KUR I-54。

この汲田貝塚の調査では縄文晩期の貝層から米が1粒、同層中イノシシの眼窩から2粒の炭化米がみつかり、同じ層から出土した土器の靱の圧痕と比較して短粒形(日本形)であることがわかった。それら米の計測は次の通りである。

1 縄文晩期 夜白式土器底 粒長5.8mm 粒幅3.3mm 長幅比1.76

2 縄文晩期 夜白式土器底 粒長6.8mm 粒幅3.6mm 長幅比1.86

汲田貝塚の調査は水田跡の発見にはつながらなかったが、同じ唐津市菜畑遺跡が昭和55、56年(1980・81)に調査され、丘陵末端に打ち込まれた矢板列がみつかり、畦に囲まれた水田跡がみつかった。谷筋にそって西から東へ流れる水路をほり、その北側に、平均幅4m、長さ7mの水田跡がみつかった。菜畑遺跡の水田は、水路、畦畔、水田面が小規模であることが明らかにされた。

菜畑遺跡の水田は、出土遺物からみて、縄文晩期後半山ノ寺式に属し、これまでのところ、水田跡(米の検出)として最も古い。高知大学中村純氏を通じての¹⁴C測定は次の通りである。

10-11層(山ノ寺式) 2680±80 B・P、(730±80 B・C) N4230

8層下(夜白式) 2620±60 B・P、(670±60 B・C) N4229

この計測によって九州における稲作栽培の開始時期はほぼ縄文晩期後半山ノ寺式の時期にあるものとみてよい。

さて縄文晩期、菜畑遺跡を頂点とした西北九州の遺跡から発見される石器の特徴をあげると石庖丁・磨製石斧・扁平片刃石斧等で、終末の夜白式の段階に挟入石斧が出現する。これらの石器はいわゆる大陸系石器と称するもので、稲作開始前後に朝鮮半島南部地帯から導入されたものと推理できる。縄文晩期において、大陸系磨製石器が西北九州に広くみられるのは稲作の導入と関係があるからである。これら石器を通して、韓国における稲作の開始と、西北九州への導入を詮索してみよう。

韓国の稲作開始についての関心はかなり古い。浜田耕作・梅原末治によって大正8年(1919)慶尚南道金海市会峴里貝塚(「金海貝塚発掘調査報告」「古蹟調査報告」第1冊、大正9年)において稲が発見され注目された。韓国の稲作開始期の遺跡として注目されるのは、京畿道驪州郡占東面欣岩里遺跡で、ソウル大学考古学研究室の調査で明らかにされた12号住居跡である。

この住居跡からみつかった炭化米は無文土器と有柄式石剣、石庖丁、磨製片刃石斧、紡錘車などであり、米のほか大麦、粟、蜀黍などがみつかった。欣岩里遺跡は韓国原子力研究所の研究で、 $3210 \pm 70 \text{ B} \cdot \text{P}$ 、 $(1260 \pm 70 \text{ B} \cdot \text{C})$ 、 $2620 \pm 100 \text{ B} \cdot \text{P}$ 、 $(760 \pm 100 \text{ B} \cdot \text{C})$ と測定されている。次に忠清南道扶余郡草村面松菊里遺跡では1号住居跡から無文土器とともに遼寧式銅劍、石剣、磨製石斧などがみつき、韓国原子力研究所の測定は $2665 \pm 60 \text{ B} \cdot \text{P}$ 、 $(751 \pm 60 \text{ B} \cdot \text{C})$ 、 $2565 \pm 90 \text{ B} \cdot \text{P}$ ($615 \pm 90 \text{ B} \cdot \text{C}$)である。欣岩里遺跡の年代はほぼ3000年前、松菊里遺跡は2600年前であり、朝鮮半島の稲作は無文土器文化時代に半島中部漢江流域から南下したことが理解できる。

朝鮮半島南部における稲作の発展は、北部九州地帯で大陸系石器と称される磨製石器の分布によって明らかにされる。まず収穫具としている石庖丁の状況をみてみよう。全榮来による分類（『韓国青銅器時代文化の研究』1991）では朝鮮半島の石庖丁を5形式（図1）に分ける。驪州欣岩里では1期長身杏仁形片刃石庖丁・2期長身半月形片刃石庖丁がみつかっており、南下して晋陽大坪里、扶余松菊里では3期の短身半月形片刃石庖丁がみついている。更に南下して韓国南岸地方の馬山市城山遺跡では4期短身半月形片刃石庖丁が出土し、この時期に朝鮮海峡を渡り、唐津市菜畑、福岡板付遺跡に達している。菜畑遺跡でみついている擦り切り技法による有溝石庖丁は3期に韓国南部で発生し4期に北部九州に到達している。また北部九州に見られる三角形交刃石庖丁の分布も大きくみて朝鮮半島の南部から北部九州に及んでいる。これらを総合すると、稲を始め穀物を取獲する目的の石庖丁は1期から5期、すなわち朝鮮半島北部から南下して、4期に北部九州に到達したことになる。この石庖丁の道はわが国への稲の来た道を物語ることになると考えてよい。

次に農具など製作の木工具と見られ、ノミ・手斧にあたる有段石斧と抉入石斧がある。前者は長江流域から中国沿岸を北上し、山東半島に達し、その北限を泰安県大汶口遺跡（『大汶口』文物出版社・北京、1974）刃りとみる。後者は出土状況からみて山東半島刃りから発し、朝鮮半島を経て北部九州に達するものと考えられる。これについても全榮来は遺跡例をあげ詳しく分類を行っている。日本では有段石斧の導入の報告がなく、抉入石斧が菜畑遺跡を頂点として広がりをもせ、韓国南部との深い交流をみせている。

以上は大陸系石器といわれるもののうち、最も重要なものにして日本への導入のありかたをみてきた。これによって稲の来た道が韓国経由という問題は解決されよう。


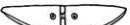



北京大学の嚴文明は日本への稲の道、稲作の開始はそれぞれの研究成果による学説であり事実かどうか断定は避けなければならない、としてより幅の広い学際的研究が必要であろうと述べている。たしかにどれ一つとっても問題のないものはなく、更に検討を加えなければならない。学際的課題として今後興味深いものに人類学的研究がある。

およそ農耕文化の導入という大きな変動は過去のすべての生活を一変するような現象をもたらしたといつてよい。この「文化変動」の根幹は何によって行われたのであろうか。人類学者

は先史、原史時代の人骨の形質をもとにして、文化変動を考えようとした。金関丈夫は縄文晩期に高顔・高身長の人骨が朝鮮半島から移動して、北部九州・山陰の一部に定着し、弥生人の形質ができたとしている。金関の人類学の研究は考古学にも大きな影響をあたえた。考古学と人類学の協同研究として昭和37年(1962)より「人骨の研究による東アジア」(長崎大学医学部・別府大学文学部)の課題で、縄文晩期人骨の発掘を目標に調査を行った。その結果は金関の推定範囲の北部九州・山陰の一部以外の地帯での弥生人の形質は縄文人の継承範囲に止どまることが分かった。この事例から金関の推理した稲作民、高身長の渡来人の範囲がいつそう明確になった。

縄文晩期農耕論はこれまでに広く学際的研究を重ねてどうか多くの支持が得られるようになった。ここで、筆者はかつて試行錯誤を重ねたすえ、わが国への稲の道を山東半島地帯に発達した龍山文化の影響のもと「黄海ルート」(『石器時代の海上交通』『海洋科学』23、1971)を設定、朝鮮半島、北部九州の道をたどるものと提案した。このことに符合するように山東省栖霞楊家園遺跡での米の発見はこのことのうらづけとなろう。現在縄文晩期にそのルートへて北部九州に伝えられたであろうとする研究が集中しておこなわれているのは考古学を中心に稲作農耕文化研究が学際的に高められている証拠である。

図1 半月形石刀型式編年一覧表(全榮来原案)

段階	型式	特徴	出土例	共伴遺物	年代
I	長身杏仁形片刃石庖丁 	長身杏仁形で、両隅角が鋭く尖り、片刃である。	江界、公黄里 寧辺、細竹里 黄州、沈村里 ピョンヤン、 湖南里、松林 石灘里	I期の有茎式石剣または有柄式石剣 II期の有茎式石剣	B.C. 8～5世紀、または4世紀
II	長身半月形外弯片刃石庖丁 	長身で杏仁形と似ているが、但し直背で外弯片刃である。	江陵、浦南洞 楊平、曹峴里 羅州、欣岩里	I、II期の有段柄式石剣	B.C. 5～4世紀
III	短身半月形外弯片刃石庖丁 	直背弧刃の半月形片刃だが、杏仁形もある。三角形交刃式の出現。短くなる。両刃も発生。	晋陽、大坪里 扶余、松菊里	III期の有柄式石剣 T字柄石剣	B.C. 3世紀
IV	短身半月形外弯両刃石庖丁 	短身半月形だが、片刃から両刃に変わる。両端隅角を抹角させる。有溝(櫛切)石庖丁の発生。	馬山、城山 唐津、棠畑 福岡、板付	有溝茎式石剣	B.C. 3～2世紀
V	細身半月形外弯両刃石庖丁 	上と同じ特徴をもつが、身幅が狭くなり、弧刃の両端が、背縁と接合されない。	飯塚、立岩 福岡、板付	有茎式石剣	B.C. 2～1世紀

全榮来著『韓国青銅器時代文化研究』より

韓國 稻作農耕文化의 傳播와 成立

沈 奉 謹

I.

韓國 稻作農耕에 대한 資料는 最近 國內의 活潑한 考古學的 調査에 의해 새로운 것이 날로 增加되고 있다. 1920年 金海貝塚에서 炭化米가 發見된 以來 1970年代의 麗州欣岩里, 扶余松菊里, 平壤南京遺跡에서 發見된 炭化米들은 이 方面 研究에 있어 重要的 資料의 役割을 하였다. 그리고 最近 紹介되고 있는 金浦平野 泥炭層에서 發見된 炭化米와 廣州궁뜰, 江華牛島에서 發見된 범석자국도 지금은 資料로서 사용하기 어렵지만, 장차 古代米를 研究하는데 一助가 될 것은 틀림없는 사실이다.

이와 같은 資料 增加에도 불구하고 韓國 稻作農耕에 대한 研究는 周邊國인 中國이나 日本에 比해서는 初步的인 段階라고 말할 수 있을 정도로 크게 進歩를 보지 못하고 있는 실정이다.

本人 역시 이 方面에 관심을 가져온 것은 사실이지만 그렇다고 지금 여기서 어떤 뚜렷한 結論을 갖고 이야기하는 것은 결코 아니다. 그러나 여기서는 이를 研究하기 위한 작업의 하나로서 지금까지 發見된 各種 關係資料를 綜合하고 分析하여 韓國 稻作農耕의 成立時期와 傳播經路를 推定하여 보려고 한다.

이 過程에서 陸稻나 水稻, 野生稻와 栽培稻의 區別問題는 지금까지의 자료인 炭化米나 범석자국만으로서 그 判斷이 어려우므로 여기서는 論外로 하였다. 여러분들의 아낌없는 叱正을 바란다.

II.

韓國은 B. C 5000~B. C 1000年 사이를 新石器時代(櫛文土器時代)라고 하며 B. C 1000~B. C 300년 사이를 青銅器時代(無文土器時代)라고 한다. 新石器時代는 日本의 繩文土器時代와 같이 採集經濟生活이 中心이었다고 생각되지만 青銅器時代는 稻作農耕을 中心한 生産經濟 體制에 접어들면서 土器, 石器, 青銅器 등 生活道具를 비롯하여 支石墓, 石棺墓 등의 墓制, 竪穴式 住居址에 環壕를 두른 集落, 石劍, 石鏃과 같은 武器 등 多方面에 걸친 變革이 이루어졌고 古朝鮮과 같은 古代國家도 이 時代에 成立되었다고 생각된다.

한편 韓國 先史時代 農耕 上限에 대해서는 이미 調査報告된 黃海北道 智塔里, 平南 弓山里, 釜山市 東三洞 등의 櫛文土器 後期段階에 해당하는 遺物層에서 이를 認定할 만한 文化要素가 確認되고 있어 農耕은 늦어도 新石器時代인 櫛文土器 後期段階에는 행하여졌다는 것을 알 수 있다. 즉 智塔里遺跡에서는 粟 또는 稗라고 推定되는 炭化穀物이 石犁, 石斧, 石鏃, 石臼, 石槍, 石鏃 등과 함께 出土되고, 弓山里遺跡에서는 石鏃, 骨鏃이 東三洞遺跡에서는

石臼, 石斧가 각각 出土되어 構文土器와 함께 이들 set關係 道具가 調理, 收穫, 耕作, 開墾이라는 農耕生活過程을 推定케하고 있다. 그러나 稻作農耕의 시작과 傳播經路에 대해서는 이 정도의 考古學的인 資料만으로 結論에 도달하기는 어렵다.

稻作農耕의 경우 지금까지의 資料에 의하면 京畿道 驪州欣岩里 第12號住居址 出土 炭化米와 慶南 陝川鳳溪里에서 出土된 범저자국이 비교적 이른 時期의 것이라고 생각되고 이와 비슷한 時期의 것이 平壤 南京遺跡이다. 그리고 그 다음이 慶南 晉陽大坪里遺跡과 全南 麗川 月內洞遺跡, 그리고 忠南 松菊里 先史遺跡 出土 炭化米라고 할 것이다. 그런데 가장 이른 時期中의 하나인 欣岩里遺跡의 實年代를 報告者는 B. C. 13~B. C. 7世紀로 推定하고 있으므로 稻作農耕의 시작은 이 欣岩里遺跡을 기준으로 한다면 우선 B. C. 7世紀 以前에 시작되었다고도 말할 수 있다.

그러면 늦어도 B. C. 7世紀 以前에 시작되었다고 推定되는 稻作農耕이 어떠한 經路를 거쳐서 韓國이나 日本에까지 각각 傳播되었는가 하는 것이다.

여기에 대해서는 北方說, 南方說, 南北二源說 등 諸學說이 있으나 北方說을 中心으로 檢討해 보기로 한다. 먼저 古代米의 特徵과 그 分布에 의하면 韓國, 日本에서 出土되는 古代米은 短粒型(日本型)이고 原產地인 中國의 경우 華南地方은 長粒型(印度型), 華中地方은 長粒型, 短粒型이 混在하지만 華北地方은 短粒型이라는 점에서 短粒型의 分布가 華北, 韓國, 日本과 連結되어 있음을 짐작할 수 있어 北方說이 유리한 입장이라고 추측된다.

다음 考古學 資料에서 알아보자. 韓國 最古米가 出土된 欣岩里 第12號 住居址의 경우 無文土器中 비교적 이른 時期로 編年되는 甗形, 壺形, 鉢形 등의 孔列土器系統과 紅陶片, 그리고 漁網錘, 高杯脚 등이 出土되고, 石器는 有柄式磨製石劍, 有莖, 無莖의 磨製石鐵, 紡錘車, 環狀石斧, 半月形石刀, 石斧 등이 出土되었다. 그리고 平壤 南京遺跡에서는 甗形土器가 出土되는 것 외에는 欣岩里와 同一한 文化樣相이며, 鳳溪里遺跡도 마찬가지이다. 그 다음 단계의 遺跡인 松菊里의 第54의 1號 住居址에서는 甗, 壺, 鉢形 등의 無文土器片과 紅陶片 그리고 磨製石劍, 石鐵片이 出土되고 隣接 遺構에서는 有溝石斧, 三角形石刀 등의 石器가 發見되었다. 晉陽大坪里遺跡에서는 蓋石式, 蒜盤式支石墓와 紅陶, 孔列土器 그리고 石斧, 石鐵, 磨製石劍, 半月形石刀, 三角形石刀, 有溝石斧, 扁平石斧 등 비교적 늦은 時期 青銅器文化 內容의 遺物이 出土되었다. 이들 內容을 綜合하여 그 共通點을 찾는다면 먼저 모든 遺跡에서 紅陶와 半月形石刀, 石劍, 石鐵 등이 出土되고 欣岩里, 大坪里遺跡에서는 孔列土器가, 그리고 平壤南京遺跡에서는 甗形土器가 出土되었다. 그런데 南部地方의 경우 欣岩里遺跡에서는 皮용이 있는 石劍이 出土되었으나 大坪里, 松菊里遺跡에서는 皮용이 없는 石劍이 出土되고 또 欣岩里에서는 보이지 않던 有溝石斧, 三角形石刀가 大坪里, 松菊里遺跡에서 각각 出土되었다. 그리고 大坪里遺跡에서는 蓋石式 또는 蒜盤式의 支石墓가 있었다. 平壤南京 36號住居址는 前記한 것과 같이 青銅I期의 늦은 時期로 編年하고 있다. 그런데

다음 段階인 II期로 編年하는 第3號 住居址에서는 斷面이 圓形인 粘土帶口緣土器와 함께 美松里型土器가 出土되었다. 물론 地域的인 차이는 있겠지만 第II期の 粘土帶口緣土器는 大田槐亭洞에서 韓國式銅劍과 함께 出土된 것과 많이 닮고 있으며 美松里型土器는 器形上 松菊里에서 出土된 紅陶와 잘 닮고 있다. 이와 같은 현상은 南京遺跡 第II期가 扶餘松菊里遺跡과 大田槐亭洞遺跡의 過渡期的인 性格을 들어내고 있음을 엿볼 수 있어서 그 보다 앞선 第I期の 늦은 時期도 年代的으로 松菊里遺跡보다 크게 앞서지 않을 것으로 보인다.

이렇게 되고 보면 韓國 稻作農耕은 우선 土器에 있어서 孔列土器와 紅陶가 set가 된 分布圈과 일단 一致되는 감이 없지 않으나 알다시피 孔列土器, 紅陶는 우리나라 東北地方의 茂山虎谷洞, 會寧五洞遺跡 등 두만강 流域과 압록강 中流에서 拂文土器 末期에 發生하여 동해안을 타고 南下하였으며 西北地方의 팽이형 土器 分布圈과는 分明하게 區別된다. 이 土器中 紅陶는 북쪽 滿洲 赤峰 紅山後 第2文化層인 紅陶文化圈과 連結될지도 모른다. 그러므로 土器의 分布圈으로는 中國과 西海를 사이에 두고 있는 平安, 黃海道の 西北地域보다는 오히려 東北地方이 유력한 位置를 확보하고 있는 셈이므로 北方說中 北廻說도 無視할 수 없다. 그러나 氣候의 으로나 半月形外彎刀와 같은 磨製石器의 分布上으로는 稻作農耕의 可能性이 희박하므로, 傳播는 되었는지 모를 일이나 栽培는 불가능했을 것이다.

따라서 考古學的인 입장에서는 華中 또는 華北地方에서 漢江流域까지의 傳播過程에 약간의 問題가 남지만 平壤 大同江 流域과 遼東半島에서 古代米가 出土되고 있는 현재의 상황으로서는 華中 以北의 北方說이 가장 有力한 위치를 차지한다고 볼 수 있다. 또한 傳播時期에 대한 積極적인 資料가 補充되어야 하겠지만 中國의 경우 B. C. 1000~2000年 사이에는 稻作農耕의 分布가 山東半島 以北地方까지 확대되고 있고, B. C. 1000年頃 西周青銅器가 말해만에서 遼東半島까지 확장되고, 大連에서 B. C. 1000年頃의 短粒型米가 出土되는 등을 감안한다면 현재까지의 B. C. 7世紀의 以前이라는 始作時期로 보아서는 北廻說이 더욱 有力한 資料를 확보하고 있는 셈이다.

III

韓國 稻作農耕의 始原을 지금까지 發見된 關係資料를 취합하여 考古學的인 입장을 중심으로 정리해 보았다. 그 결과 韓國 稻作農耕의 始作은 현재의 단계로서는 京畿道 欣岩里遺跡 出土 炭化米를 最古의 標識으로 하는 최소한 B. C. 7世紀 以前이라고 생각된다. 그리고 그 傳播過程은 中國 華中地方에서 시작된 短粒型米가 북쪽으로 확산되고 그것이 各種 磨製石器와 青銅器와 더불어 韓國 青銅器文化期에 傳來되었다고 생각된다.

따라서 韓國 稻作農耕은 當時 水田이 確認되고 있지 않은 現觀點에서 確實히 이야기하기 어렵지만 蛤刀石斧, 半月形石刀, 柱狀石斧 등의 農耕道具가 古代米 資料와 함께 出土되는 時期부터 일단 稻作農耕이 시작되었다고 보는 것이 타당하다고 생각된다. 그런 의미에서는

韓國 初期 磨製石器들은 中國華北地方과 서로 닮고 있으며 日本의 경우는 石劍, 石鐵, 三角形石刀, 有溝石斧, 蛤刀石斧 등이 韓國 南部地方의 것과 많이 닮고 있기 때문에 中國, 韓國, 日本의 順으로 그 傳播過程을 나타내고 있다고 하겠다. 그리고 만약 韓國 稻作農耕의 시작이 B. C. 10世紀 頃을 前後한 時期로 推定 可能하다면 그것은 文獻上으로 나타나는 東夷族의 移動過程이나 箕子朝鮮問題와도 적지 않은 關聯性을 가졌을 것이 豫想된다. 앞으로 北方經路로 생각되는 山東半島, 발해만 일대와 遼東半島, 北韓 등지의 農耕資料는 물론 土器, 磨製石器, 青銅器 등의 考古學的인 資料에 관심을 기울여, 보다 적극적인 結論에 도달코자 한다.

北部九州～西瀬戸内지역의 도작농경문화 전파와 성립

下條 信行

1. 北部九州의 초기도작농경

일본에서 가장 오래된 도작지대

현재, 일본 초기의 도작농경유적은 靑森縣 砂沢유적에서 보여지는 것처럼 야요이전기 동안에 本州북단에까지 퍼져있었던 것이 밝혀졌다. 이것은 초기농경의 제일차 확대는 伊勢灣 연안까지라던 종래의 생각에서 보면 큰 변혁이었다.

그러나 이 열도북단까지의 확대에 기반이 되었던 것은 도작농경의 일본 최초 전래지인 북부큐우슈우였다. 여기에서 말하는 북부큐우슈우라는 것은 바다를 두고 한반도에 직면한 현 태탄과 연안의 평야지역들로 구체적으로는 서쪽으로부터 佐賀縣 唐津평야, 福岡縣 糸島평야, 福岡평야, 粕屋평야 등에 한한 지역을 가르키고 있다. 이들 지역의 도작농경은 먼저 한반도로부터 전래, 정착해, 그후 각지에 우여곡절을 겪으면서 전래했던 것이다.

그 시대는 토기의 특징에서 각목돌대문단순기로 불려지던 시기로 지금까지의 토기편년판에서 본다면 조롱시대만기 후반에서 종말경이다.

그 대표적인 유적으로 아래의 것들이 있다.

唐津평야 菜畑遺蹟(佐賀縣唐津市), 宇木汲田遺蹟(同)

糸島지구 曲り田遺蹟(福岡縣糸島郡二丈町)

福岡평야 板付遺蹟(福岡市博多區板付)

雀居遺蹟(福岡市博多區)

粕屋평야 江辻遺蹟(福岡縣粕屋郡粕屋町)

이들 유적에서 그 이전 조롱시대에 존재하지 않았던 많은 도작농경에 관한 새로운 유구나 유물이 출토되고 있다.

초기의 수전

초기 수전의 예로서는 菜畑遺蹟, 板付遺蹟, 野多目遺蹟(福岡市南區)이 알려져 있다. 菜畑遺蹟은 계곡의 양쪽에 펼쳐진 수전인데 그 중앙에 수로가 뚫리고 있다. 이 수로는 배수를 목적으로 한 배수형으로 지형의 상황에 따라 개간을 행하였다. 板付遺蹟, 野多目遺蹟은 물을 끌어들이는 관개형의 수전이다.

板付遺蹟을 예로 들면 대지연변을 따라서 수로를 파고 상류로부터 물을 끌어들이, 자연목, 나무가지, 풀 등을 섞어 제방을 만들고 여기에 물을 저장하여 수위를 높였다. 높아진 물은

수로와 논사이의 제방을 갈라 만든 소수로를 통해 논에 흘러들도록 되어있다. 이 소수로의 물고개는 말뚝, 널판지를 박아 우수시 수량의 미조경이 측정되도록 되어 있다. 또 높은 곳의 수전에서 내려온 나머지 물은 환류시켜 제방으로 되보내기 위한 소수로도 설치되어 있는 등 용수의 활용이 지극히 합리적이다. 논에 보내진 용수는 높은 곳의 수전에서 낮은 곳의 수전으로 순차적으로 보내지게 되어 있다.

논은 고랑에 의해 구획되지만 板付遺蹟의 경우 단벽 10m, 장벽 50m나 되는 대구획의 것도 있어 일반의 야요이시대 수전에 비해 대형이다.

이상과 같이 초기 수전의 단계에서부터 용수의 활용과 관리는 합리적인 동시에 고도의 것이어서, 여기에는 도작을 전한 사람들의 오랜 경험과 깊은 지식이 없이는 될 수 없을 것이다.

목제농구

일본의 도작경작용의 농구는 오랫동안 날부분도 목재로 된 농구가 대부분으로 고분시대중기 무렵까지 이와 같은 상태는 계속되는데, 그 선두가 되었던 것은 이 시기에 출현한 목제농구로서 葉畑遺蹟이나 板付遺蹟에서 곡괭이(양단에 날이 있는 괭이)와 수전의 표면을 다듬는 선호미가 출토되고 있다. 초기 수전에서는 이 두 종류가 주체라고 생각되며, 삼동의 개척, 흙운반의 도구는 뒤에 출현하는 것으로 보여지고 있다. 이런 생각은 현재도 크게 변화하지 않았지만 최근 발굴된 雀居遺蹟에서는 평곡괭이, 나무삼, 목제노형삼, 공이 등도 출토되어, 야요이시대~고분시대의 기본적인 목제농구는 도작농경 전래 초기부터 거의가 갖추어졌던 것이 판명되었다. 현재 한반도와 직접 비교되는 목제농구는 출현되고 있지 않지만 이들도 수도농경의 전래와 함께 출현한 것이 틀림없다.

석제농공구(대목제마제석기)

여기서도 조몽시대에 보여지지 않던 새로운 도구가 출현한다. 먼저 농구관계로서는 반월형석도와 석경이 있다. 초기의 반월형석도에는 구멍을 비벼서 뚫은 것이 보이는데(葉畑遺蹟, 宇木汲田遺蹟), 이와 같은 반월형석도는 한반도의 남부에 비교적 많은 것으로 날부분이 편인인 점도 공통하고 있다. 또 북부큐우슈우 초기 도작기의 반월형석도 석질(혈암질 사암)과는 다른 것이다.

공구는 유구석부와 편평편인석부 등이 있다. 어느 것도 날이 편인인 것으로 가공을 위한 석부이다.

북부큐우슈우 초기 도작기의 유구석부는 기단부가 평기인데 결입이 뚜렷하고 후주면은 중상으로 내경하며, 날부분의 호도 뚜렷하다. 횡단면형은 각이 뚜렷한 장방형을 특징으로 하지만 이들 각종 특징을 결비하고 있는 것은 한반도 남부의 편인인석부이다. 편평편인석부는 평면 장방형인데 양측은 곧은 면을 하고 후주면은 중상의 내경을 하고 있다. 이 두 종의 석

부는 조몽석부에는 보이지 않는 형태로써 규칙적으로 정연하게 만든 것이 나타나며, 한반도 남부의 석기가 전래된 것을 시사하고 있다.

수용되지 않은 석기와 변형된 대륙계 마제석기

한반도 남부에서는 상기의 석기와 나란히 별채용의 양인석부가 발달하고 있다. 평면형은 장방형인데 횡단면은 원형내지 타원형을 한 두꺼운 석부로서 별채석부로서는 발달이 극에 달한 양질석부이다. 하지만 이 석부만은 일본에 전해지지 않았다. 이 시기 일본에서 사용된 석부는 기단부가 좁고 날부분이 넓은 평면장대형을 한 두께도 얇은 석부인데 크기만 크다. 이것은 조몽별채석부에 유사한 것으로서 이것을 약간 대형화하고 중량을 더한 것이기 때문에 기본적으로는 조몽별채석부의 계보상에 있는 것이다. 이러한 점에서 초기농경문화의 전파에 있어 일본에 전래된 문물은 아무리 양질의 것이 한반도에 성립되어 있어도 전파되지 않았거나, 되었어도 극히 적은 양의 희박한 문물만이 전래 또는 수용되게 된 것을 짐작할 수 있을 것이다.

이것은 그 후 전래 마제석기에도 나타나, 한반도에서 형태가 완성된 마제석기는 전래의 초기에 있어서는 원형의 형태를 전하였으나, 즉시 변형되는 등, 일본에서 서서히 장기간에 걸쳐 형이 이루어진 것이 아니기 때문에 전래석기의 우수한 성질을 계속 정착시키지 못하고 점점 포탄형태로 후퇴하여 일본적인 형태로 바뀌고 말았다.

수용과 비수용의 문제는 토기도 마찬가지여서, 존재하지 않았던 호는 적극적으로 수용되었으나, 삶는데 필요한 용은 재래의 토기(삼발)가 존재하고 있었기 때문에 혼탁적으로 밖에 수용되지 않았다.

야요이토기의 출현

외래적인가, 내부발생적인가 하는 그 출현 계기에 대한 논의는 나뉘어져 있는 형편이지만, 좌우간 용형토기에서 각목돌대문토기는 목리문으로 표면이 정리되고 구연이 약간 외반하여 황갈색의 야요이토기로 변하면서 야요이토기가 출현한다. 이러한 출현도 도작출현의 땅인 북부큐우슈우에서 일어났기 때문에 그 최초의 토기형식을 板付I式이라고 한다. 이 분포지역은 한정되어 있었기 때문에 이어서 板付II式으로 이행된다. 이 板付II式の 오래된 단계(板付IIa式)에 와서 북부큐우슈우를 벗어나 퍼지기 때문에 현재 東部瀬戸内까지 보이고 있다. 이 확산이 또한 새로운 야요이문화를 퍼뜨리게 된다.

2. 西部瀬戸内の 초기도작농경

東九州의 초기도작문화

大分평야에도 조몽만기에 이미 수도농경이 전래했을 가능성이 있다. 충분한 자료는 없지

만 挾間町下黒野遺蹟, 大分市 稲田市遺蹟이 참고된다. 양 유적으로부터 각목요대문토기(옹), 천발과 함께 중형의 호가 출토되고 있는 것이 그 증거이다. 그리고 옹은 일조요대로서 어깨 윗부분에 조잡한 조경흔적을 비교적 잘 남기고 저부에는 대부를 두지 않은 것인데 북부큐우슈우와는 다른 특징을 가진 것이다.

그후 板付IIa式的 단계에도 계속 이어지는 듯하며, 大分市 下志村遺蹟에서 같은시기의 토기가 출토해 그 일부 옹은 동북부큐우슈우의 토기와 공통되고 또 瀬戸内에 공통하는 시문법이 호에 보인다. 愛媛에서 佐賀關에 이어지는 佐田岬반도의 신단에 있는 野坂패총은 조몽후기말의 三万田식에서 야요이중기의 下城식까지 연속해서 大分계의 토기를 출토하는 유적이지만, 이중 板付II式的 토기가 포함되어 있는 것은 같은 시기의 문화가 이 지방까지 퍼져 있었던 것을 나타내고 있다.

西部瀬戸内の 초기수도문화

초기수도농경은 시코쿠의 북안을 동으로 하여 만기후반의 요대문토기단순단계에 愛媛縣松山市大淵遺蹟, 香川縣松山市林·坊城遺蹟에 수도농경의 흔적을 볼 수가 있다. 大淵遺蹟에서는 쌀, 쌀의 압흔, 도경의 반월형석도, 석경이 출토되며 林·坊城遺蹟에서는 팽이, 삼 등의 목제농구가 출토되고 있다. 大淵遺蹟 옹의 절대적 다수는 재래의 옹이지만, 그중 얼마의 옹은 東九州의 그것에 유사한 것이 있어, 이곳의 수도농경은 북부큐우슈우와 직접 관련되지 않은 것을 알 수 있다. 그리고 호의 건부는 한반도 남부에서 특징적으로 보여지는 후반의 가지문토기가(채토)가 있다. 그러나 호의 출토량은 3로서 극히 소량으로, 수도가 전해졌다고 해도 반드시 그 보급, 정착도에 있어서 높게 평가는 되지 않는다.

그리고 편평편인석부, 별채석부는 조몽계의 것이어서 북부큐우슈우와 같은 대목화는 보이지 않고 반월형석도도 1점은 방형, 양측홈식과 다른 1점은 외반인반월형이지만 원형구멍이 없고 양측홈의 것이어서, 대목계 마제석기가 전해지는 형태에도 변화가 생기고 있다.

일본화 되었다고 하더라도 일종의 대목계마제석기가 瀬戸内를 석질하는 것은 새로와진 板付II式문화가 파급되면서부터 이다.

인간의 이동과 문화 변화

-고고학과 인류학의 성과로부터-

田中良之

1. 머리말

문화가 변화한다고 하는 것에는 오늘날 많은 요인이 생각되어지겠지만, 과거에는 어느 인간사회에서도 같은 진화·발전의 과정을 밟는다는 생각이 주류였던 시기가 있었다. 그 다음으로는 인간집단의 이동이나 교류에 의해 문화가 퍼져, 그 결과 문화가 변화한다고 하는 생각이 일반적으로 되어, 그 후에 오히려 변화의 과정을 증시하고, 사회·문화의 복잡한 구조가 어떻게 서로 관련되어 변화하는가 하는 시스템이나 구조의 움직임을 관심의 역점으로 하는 연구가 주류로 되었다. 그리고 오늘날에는 특히 가치관이나 인간의 심리까지를 고려하는 연구도 행하여지게 되었다.

유적이나 유물과 같은 물질로써 문화를 다루는 고고학의 특성에서는 문화가 왜, 어떻게 변화하는가 하는 것은 크나 큰 테마로서 계속되어질 것이다. 그리고 문화변화에 대한 생각이 변하여, 인간의 이동이 문화변화의 원인, 그 전부가 아닌 것은 주지하는 바라고 하더라도 인간의 이동에 의해 일어나는 변화의 사례도 있는 것은 부정할 수 없다. 요컨대 「인간의 이동과 문화변화」는 오늘날 고고학의 중요한 테마의 하나인 것이다.

그런데 인간집단의 이동을 고고학적으로 실증하는 것은 결코 쉬운 일은 아니다. 그러나 그런 곤란함을 극복하기 위해서 고고학자는 여러가지 방법을 생각해 왔다. 그러한 방법의 하나는 고인골 자료를 검토하는 것이다. 즉, 다른 문화를 받아들인 뒤에 인골의 형질이 변화가 생겨, 더구나 그 형질이 문화 발신지의 것과 같거나, 유사한 점이 있다면 문화의 이동이 인간집단의 이주를 반영한 것일 가능성이 강하게 될 것이다.

일찌기 이와같은 논의는 유럽의 신석기·청동기시대를 사례로 하여 행하여져 왔다. 그러나 이와같은 사례가 일본에도 있다.

그것은 야요이시대의 개시기, 이른바 일본에서 도작농경이 시작될 무렵의 北部九州를 무대로 한 그것이다.

2. 인류학에서의 도래설

九州大學醫學部 教授였던 金關丈夫씨는 杵築·야요이·고분시대의 인골자료를 비교한 결과, 야요이시대의 北部九州에는 그 당시의 杵築인과 다른 고안·고신장의 집단이 분포하는 것에 주목하였다. 그리고, 이 사실을 설명할 수 있는 가설로서 杵築시대 말기에 도작의 기술을 가진 집단이 한반도에서 北部九州에 도래하여 재래의 杵築인 집단과 혼혈해 고안·고

신장의 주요인 형질이 되었다고 하는 설을 제창하였다. 더우기 혼혈의 영향은 山陰과 近畿지방에는 미친데 비하여, 西北九州와 南九州에는 미치지 않았다고 하였다. 1955년대의 일이다.

이 金關씨의 설은 도래인의 옛땅·도래한 시기·장소·도래·혼혈의 형질적 영향이 미친 범위와 방향 등을 제시하고, 당시의 형질인류학·고고학의 성과를 종합하게 되어 비로소 구체적으로 고고학적인 위치를 차지했다고 하는 점에서 높이 평가되어야 할 것이다. 이것에 대하여 인류학회에서는 긴 논의가 행해져 왔지만, 오늘날에는 널리 인정받을 수 있게 되었다.

그런데 근년 植原和郎씨는 山口縣土井ヶ浜유적과 佐賀縣三津永田유적의 주요이인이 북아시아의 집단과 닮은 것에서, 도래인의 기원은 북아시아에 있다고 하고, 金關씨에 의해 도래적으로 되어진 土井ヶ浜유적 등의 주요이인은 도래인 그 자체라고 했다. 더욱이 인구증가와 두형의 변화율에 기하여 도래인의 양이 기원전 300년부터 기원 700년까지의 1,000년간에 3,024,156인에 이른다고 하는 계산 결과를 발표해 대량 도래설을 주장하고 있다.

이와같이 金關씨의 도래설을 모함해서 도작의 전파·수용기에 있어서 인간의 이동에 관한 학설은 주로 인류학의 입장에서 제출되고 있다. 그뿐만인가, 최근에는 「제멋대로」에 가까운 상태라고조차 말할 수 있다. 이것에 대하여 고고학의 입장에서는 어떠한 대응을 해야 할 것일까.

3. 고고학에서 본 도래설

한일의 고고학적 사실 관계는 沈奉護·下條信行 兩씨의 발표에 의해서 나타난 그대로 일 것이다. 즉, 토기·석기 등의 문화적 요소가 많은 것들이 도작의 개시기를 전후해서 한반도로부터 北部九州를 중심으로 한 지역에도 전래되어 곧 야요이문화가 성립된다. 그러나 한반도에서의 문화전파는 한 시기에 한정되어 있는 것이 아니고, 산발적이지만 조몽시대말기 전 반에는 적어도 쌀의 출토에 있고, 말기중엽에는 토기의 문양에 영향이 보이는 등, 긴 시간속에서 문화의 전파가 일어난 흔적이 있다. 그리고 토기와 석기에 있어서도 전부 한반도계의 것인가 하면 그렇지 않고, 예를들면 용은 조몽계인데, 호는 한반도계라던가 하여, 선택적으로 문화가 수용되고 있다. 즉, 문화의 발신지인 한반도의 「무문토기문화」 그것에서 변화한 것이 아니기 때문이다. 더욱이 이 시기에는 한반도계(무문토기문화계)의 문물·유구만이 출토되는 유적은 한 군데도 없고 전부 혼재한 상태로 출토된다.

이와같은 사실은 도래인의 수와 역할을 생각하는데 중요한 것이다. 즉, 도래인이 도작과 이에 관련하는 여러가지 기술·정보를 전하고, 그것에 의해서 일본이 도작농경사회로 변화했다는 것은 확실하지만, 도래인이 조몽인을 압도하여, 몰아내고 집락을 형성하거나 하는 상태는 아니었고, 오히려 조몽인과 평화롭게 함께 거주한 흔적을 살필 수 있기 때문이다.

4. 도래의 형태와 문화변화

그러면 도래인의 도래형태는 어떠한 것이었을까. 도래인은 대량이었을까. 혹은 소량이었을까. 문화변화의 형태는 어떻게 실명가능할까. 당초, 도래인을 받아들여 혼혈한 것이라면 수용인인 조몽인은 어떠한 결혼이나 거주 시스템을 가지고 있었는가 하는 등의 문제가 점차 제시될 것이다.

그 중에서도 우선 극히 대량의 도래인을 상정하는 埴原씨의 가설이 문제가 될 것 같다. 이 설은 상기한 바와같이 고고학적 사실에서는 도저히 지지될 수 없는 것이다. 그러면 어떻게 비판할 것인가.

埴原씨는 주로 인구증가율에 기준을 두고 도래인의 수량을 추정했다. 소위 효몽말기와 7세기의 추정인구(75,800인과 5,399,800인)에서 약 1,000년간의 년간인구 증가율(0.427%)을 구하고 세계 농경민의 인구증가율과 비교해서, 그 차이를 도래인에 의한 인구증가라고 생각한 것이다. 결국 세계농경민의 기원 1천년기에 있어서의 인구증가율이 0.1%정도인 것에서, 0.427%라고하는 증가율은 생각하기 어렵고, 0.1%를 제외한 나머지를 도래인에 의한 증가로 생각하여 1,000년간에 3,024,156인의 도래가 있었다고 한 것이다.

이것에 대해서는 몇가지의 문제점을 지적할 수가 있지만, 무엇보다도 문제가 되는 것은 埴原씨가 사용한 세계농경민의 인구증가율은 어느 농경사회에 있어서도 안정기에 들어간 단계 이후의 것이고 농경개시 직후의 인구증가는 그 속에 포함되고 있지 않은 것이다.

여기에서 한 예로서 福岡縣小都市三國丘陵의 유적군을 보아도 농경개시기의 유적은 7개 소인 것에 비해서, 전기말의 유적은 28개소이고, 그 중 3개소는 한국 무문토기의 세트가 출토하고 있어 도래인의 주거지로 생각되어지게 한다. 이 사이의 시간 폭은 길어도 200년 정도로 생각할 수 있기 때문에 埴原씨가 사용한 인구증가율 추정식에 이들 유적수를 대입해서 인구증가율을 구하면 0.693%가 되어 埴原씨가 생각하기 어렵다고 한 증가율을 상회하는 것이다. 물론 이것은 각 유적의 인구를 같은 수로 해서 가정한 시산이어서 문제는 남는다. 더구나 전기말의 집락은 전기초두 집락의 일부를 포섭한 규모인 것으로 알려져, 그 증가율이 특히 더 크게 될 수는 있어도 적게되지는 않을 것이다. 그래서 인구증가율에 기초한 대량의 도래인을 상정하였던 埴原씨의 가설은 그 근거를 잃었다고 말할 수 있다.

이와같이 도래인의 수는 조몽인을 흡수해 버릴 정도의 대량은 아니라고하는 고고학계의 주장이 지지될 것이다. 또 이에 의해 조몽인의 일정적 주체성이 상정되어 무문토기문화 전부를 받아들인 것이 아니고 선택적으로 수용한 형태도 설명이 되어진다. 더우기 조몽만기나 야요이시대의 서일본에 있어서 혼인·거주 시스템은 생계적(선택거주적)인 가능성을 시사하는 분석에가 얻어지기 시작하고 있다. 선택이 시사한 것처럼 생계적 사회는 땀벼림이 느슨하여 도래인과 조몽인이 평화롭게 공존하였다고 하는 고고학적 상정은 모순이 아닐 것이다.

한일도작농경문화의 기원과 전파

賀川光夫

한일에 있어서 「농경의 기원」이라고 하는 연구과제는 항상 오래고도 새로운 문제이다. 특히 일본에서는 1927년 神奈川縣 相模原市(下新磯村)勝坂遺蹟의 발굴에 의해 조몽중기 勝坂式 토기와 함께 다량의 타제석부가 출토되어, 이것을 경작구로 하여 농경을 행하였다고 하는 의견이 大山柏에 의해 문제로 제기 되었다. 이 사례는 오늘날과 같이 관련된 여러 분야의 연구와 다수의 연구자에 의한 종합적 연구에 의한 논의론 더하는 시대와는 달리, 적은 자료와 소수의 연구자에 의해 행하여졌던 점도 있어 오늘날에 이르러 사라지고 있다. 그러나 타제석기가 「흙파는 도구」로서 농경론의 문제로 계속되는 것을 생각하면, 농경기원의 과제에 있어서, 학사적 존재의 의의는 조금도 사라지지 않는다. 왜냐하면, 고고학은 과정의 학문으로, 추론의 범위에 그치지 마련인 것이기 때문이다.

大山柏의 타제석부 농경론에 긍정적 입장을 취한 것은 森本六爾였다. 森本은 조몽시대에 농경이 개시되었던 唐古유적의 조사(야요이시대)에서 확신을 가지고 추정하였다. 후에 藤森 策一의 「조몽농경」은 이 선상의 연구물 모체로 하고 있는 것이 분명하다. 그러나 大山의 중기농경론은 1937년 山内清男에 의해 반론(歷史公論)이 제기되어, 논의가 활발해졌다. 이 단계의 농경론에 결정적으로 결여되어 있던 것은, 재배식물에 대한 자르부족과, 농업육종학과 의 협동연구태세의 결여 등을 들 수 있다.

재배식물이 버라고 하는 구체적인 제시는, 1951년 坂本經麿에 의한 熊本縣 玉名市 古閑原 패총의 발굴에서이다. 이 조사에서, 조몽중기 阿高式토기에 혼재한 여러 알의 탄화미가 발견되어 도작개시에 대한 새로운 문제제기가 있었다. 이 坂本の 연구도 큐우슈우 북부에 있어서 도작개시론으로서 오늘날도 계속되어야 할 검토과제이다.

그런데 도작농경의 기원문제를 급속히 활발하게 한 것은 1950년부터 시작된 일본고고학협회의 야요이식문화특별위원회, 1962년부터 시작된 시북큐우슈우특별위원회 등 두개의 조사연구기관이었다. 전자는 杉原莊介, 森貞次郎, 岡崎敏 등에 의한 夜臼, 板付유적 등 북부큐우슈우의 조몽만기, 야요이초기의 중요유적 발굴을 통하여 행하여졌다. 이 조사연구는 福岡市 교육위원회에 의하여 오늘날까지 계속되어, 환호집락을 시작으로 한 수전지의 발전으로 이어지고 있다. 후자는 鳥原半島의 雲仙岳山麓一帶의 조몽만기 집락과 지석묘의 조사등이 중심이었으나, 鳥原市 교외의 山ノ寺유적 등에서 범서자국토기 등이 발견되어, 여기에서도 도작농경의 문제가 제기되었다.

수전의 탐색을 주목표로서 조사가 행하여진 것은 鏡山猛을 중심으로 하는 일본·프랑스의 합동조사, 唐津市 汲田유적의 조사였다. 이 조사에 의해 가까이 접한 상하 패층에서 조몽중

말(夜白), 야요이촉기(板付)등의 층위가 확인되고, 큐우슈우대학 이학부 高島良正연구실에 의해 다음과 같은 C14측정결과가 보고되었다.

효몽만기(夜白式) 2370 ± 50 B. P. (420 ± 50 B. C.) KURI-53

야요이초기(板付 I 式) 2240 ± 50 B. P. (290 ± 50 B. C.) KURI-54

이 汲田其塚의 조사에서는 효몽만기의 폐층에서 탄화미가 1립, 같은 층 중 멧돼지의 腿窩에서 2립의 탄화미가 발견되고, 같은 층에서 출토한 토기의 난알 압흔과 비교하여 단립형(일본형)인 것을 알았다. 이들 쌀의 계층은 다음과 같다.

1. 효몽만기 夜白式토기저 粒長5.8mm 粒幅 3.3mm 長幅比 1.76
2. 효몽만기 夜白式토기저 粒長6.8mm 粒幅 3.6mm 長幅比 1.86

汲田패층의 조사는 수전지의 발견으로는 이어지지 않았으나 같은 唐津市 葉畑유적이 1980, 81년에 조사되어, 구름 밑단에 집중된 널판지가 발견되고 두렁에 둘러싸인 수전지가 발견되었다. 골짜기 줄기를 따라서 서에서 동으로 흐르는 수로를 파고 그 북측에 평균 폭 4m 길이 7m의 수전지가 발견되었다. 葉畑유적의 수전은, 수로, 논두렁, 수전면이 소규모인 것으로 밝혀졌다.

葉畑유적의 수전은 출토유물에서 보아 효몽만기후반 山ノ寺式에 속하고, 지금까지의 수전지(쌀의 겉줄)로서 가장 오래된 것이다. 高和大學 中村純연구실에서의 C14측정은 다음과 같다.

10-11(山ノ寺式) 2680 ± 80 B. P.(730 ± 80 B. C.) N4230

8층 下(夜白式) 2620 ± 60 B. P.(670 ± 60 B. C.) N4229

이 계층에 의해 큐우슈우의 도작재배 개시시기는 거의 효몽만기후반 山ノ寺식의 시기에 있었던 것으로 볼 수 있다.

그런데 효몽만기, 葉畑유적을 정점으로 한 서북큐우슈우의 유적에서 발견된 석기의 특성을 들면 석도, 마제석부, 편평원인석부 등으로, 종말의 夜白式 단계에 유구석부가 출현 한다.

이들의 석기는 이른바 대륙계석기라 칭하는 것으로, 도작개시 전후에 한반도 남부지대에서 도입된 것으로 추정할 수 있다.

효몽만기에 있어서, 대륙계 마제석기가 서북큐우슈우에 널리 보이는 것은 도작의 도입과 관계가 있기 때문이다. 이들 석기를 통하여 한국에 있어서 도작의 개시와 서북큐우슈우로의

도임을 살펴 보겠다.

한국의 도작개시에 대한 관심은 상당히 오래된다. 浜田耕作, 梅原末治에 의해 1920년 경 상남도 김해시 회현리패총(『김해패총발굴조사보고』[『고적조사보고』제 1책, 大正 9년)에서 벼가 발견되어 주목되었다. 한국의 도작개시기 유적으로서 주목되는 것은, 경기도 여주군 점동면 혼암리유적으로 서울대학교 고고학연구소의 조사에서 밝혀진 12호 주거지이다. 이 주거지에서 발견된 탄화미는 무문토기와 유병석석검, 석도, 마제편인석부, 방추차 등과 함께, 쌀 외에 보리, 조, 수수 등이 발견되었다. 혼암리유적은 한국 원자력 연구소의 연구에서 3210 ± 70 B. P. (1260 ± 70 B. C.), 2620 ± 100 B. P. (760 ± 100 B. C.)로 측정되어졌다.

다음으로 충청남도 부여군 초촌면 송국리유적 제 1호 주거지에서 무문토기와 함께 요령식 동검, 석검, 마제석부 등이 발견되어, 한국 원자력 연구소의 측정으로 2665 ± 60 B. P. (751 ± 60 B. C.), 2565 ± 90 B. P. (615 ± 90 B. C.)이었다. 혼암리유적의 연대는 거의 3000년전, 송국리유적은 2600년전 이어서 한반도의 도작은 무문토기문화시대에 반도중부 한강유역에서 남하한 것을 알 수 있다.

한반도 남부의 도작발전은 북부큐우슈우지역에서의 대륙계 석기라고 불리는 마제석기의 분포에 의해 밝혀진다. 우선 수화구로서 석도의 상황을 보겠다. 전영래에 의한 분류(『한국 청동기시대문화의 연구』1991)에서는 한반도의 석도를 5형식(도 1)으로 나눈다. 여주 혼암리에서는 1기 長身齊仁形편인석도, 2기 장신반월형편인석도가 발견되고 있으며, 남하하여 진양 대평리, 부여 송국리에서는 3기의 단신반월형편인석도가 발견되고 있다. 다시 남하하여 한국 남안지방의 마산시 성산유적에서는 4기 단신반월형량인석도가 출토되며, 이 시기에 대한해협을 건너 唐津市 菜畑, 福岡板付유적에 이르고 있다. 菜畑유적에서 발견된 擦切기법에 의한 유구석도는 3기에 한국남부에서 발생하며, 4기에 북부큐우슈우에 도달되었다. 또 북부큐우슈우에 보이는 삼각형교인석도의 분포도 크게 보면 한반도의 남부에서 북부큐우슈우에 이르고 있다. 이들을 종합하면 벼를 시작으로 곡물을 수확하는 목적의 반월형 석도는 1기에서 5기, 즉 한반도에서 남하하여 4기에 북부큐우슈우에 도달한 것이 된다. 이 석도의 길은 일본으로 벼가 온 길을 이야기하는 것이 된다고 생각할 수 있다.

다음으로 농구등 목기의 제작 공구로 보이는 끌, 자귀에 해당하는 유단석부와 유구석부가 있다. 전자는 長江유역에서 중국연안으로 북상하여 산둥반도에 이르러 그 북쪽 한계를 泰安縣 大汶口유적(『大汶口』文物出版社, 北京, 1974)부근이라고 본다. 후자는 출토상황에서 보아 산둥반도 부근에서 출발하여, 한반도를 지나 북부큐우슈우에 이르는 것이라 생각할 수 있다. 여기에 대해서도 전영래는 유적 예를 들어 상세하게 분류하고 있다. 일본에서는 유단석부 도입 보고가 없고, 유구석부가 菜畑유적을 정점으로 널리 보여, 한국 남부와는 길은 교류를 보이고 있다.

이상은 대륙계 석기라고 말해지는 것 중, 가장 중요한 것에 한정하여 일본으로의 도입경로를 살펴보았다. 이것에 의해 벼가 온 길이 한국 경유라고 하는 문제는 해결된다.

북경대학의 嚴文暉은 일본으로의 벼의 루트, 도작의 개시는 각각의 연구성과에 의한 학술이어서 사실인지 아닌지의 판정은 피해야 되겠으며, 보다 폭넓은 관련분야들이 연구가 필요할 것이라고 서술하고 있다. 확실히 어느 것도 문제가 없는 것은 없어서, 다시 검토를 더 해야만 한다. 관련분야의 과제로서 급후 흥미로운 것으로는 인류학적 연구가 있다.

대개 농경문화의 도입이라고 하는 큰 변동은 과거의 모든 생활을 일변하는 듯한 현상을 초래했다고 말해도 좋다. 이 「문화변동」의 근간은 무엇에 의해 행하여지는 것일까. 인류학자는 선사·원사시대의 인골형질을 근거로 하여 문화변동을 생각하려 하였다. 金關丈夫는 조몽만기에 高顔, 高身長의 도작민이 한반도로부터 이동하여, 북부큐우슈우, 山陰의 일부에 정착하여 야요이인의 형질이 생겼다고 하고 있다. 金關의 인류학 연구는 고고학에도 큰 영향을 주었다. 고고학과 인류학의 협동연구로서 1962년부터 「인골의 연구에 의한 동아시아」(長崎大學의 학부, 別府大學문학부)의 과제에서, 조몽만기 인골의 발골을 목표로 조사를 행하였다. 그 결과 金關의 추정범위인 북부큐우슈우·山陰의 일부 이외 저대에서의 야요이인의 형질은 조몽만의 계승범위에 그치는 것을 알았다. 이 사례에서 金關이 추정한 도작민·高身長의 도래인 범위가 한층 더 명확히 되었다.

조몽만기 농경론은 지금까지 널리 관련분야들과의 연구를 거듭하여 그럭저럭 많은 지지층 얻게 되었다. 여기서 필자는 일찍이 시행착오를 거듭한 끝에 일본으로의 벼의 루트를 산동 반도지대에 발달한 용산문화의 영향에 근거「황해루트」(「석기시대의 해상교통」『해양과학』23, 1971)를 설정, 한반도, 북부큐우슈우의 길을 더듬어 찾을 것을 제안하였다. 이것에 부합하듯이 山東省 栖霞縣 楊家園유적에서의 쌀의 발견은 이것을 뒷받침 하는 증거가 될 것이다. 현재 조몽만기의 그 루트를 지나서 북부큐우슈우에 전해졌을 것이라고 하는 연구가 관련연구분야와 공통적으로 집중되어 행해지고 있는 것은 고고학을 중심으로 도적농경문화연구가 관련된 여러 분야와의 연구에서 활발해지고 있는 증거이다.

第3回 日韓シンポジウム
先史時代の日韓交流と大分
— 水稻農耕文化の伝播と成立 —

編集・発行 大分県教育委員会文化課
〒870 大分市府内町3-10-1
T E L 0975-36-1111
(内線5491～5496)

印刷 佐伯印刷株式会社
〒870 大分市古国府1155-1
T E L 0975-43-1211
